

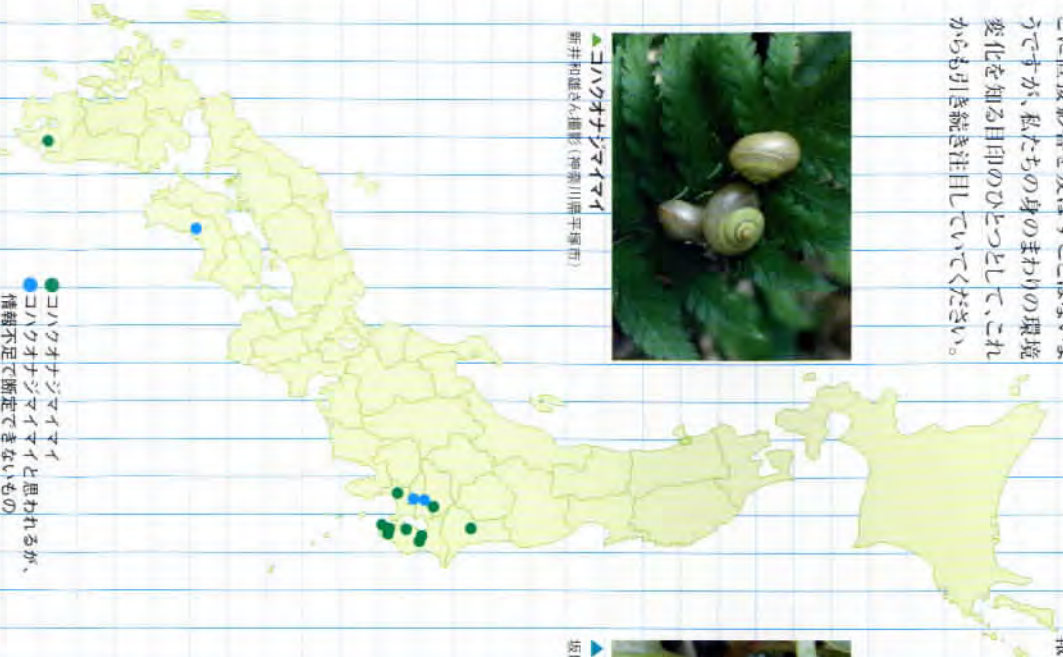
注目種3種

コハクオナジマイマイ ― 国内外来種の拡大

もともとは九州地方に生息していたカタツムリですが、千葉県を中心に、埼玉県や東京都などの関東地方各地から報告をいただきました。従来知られていた分布域を少し拡大させる結果となり、着実に広がっていることがよくわかりました。今後も、さらなる拡大が予想されます。その他のカタツムリなどに直接影響を及ぼすことはないようですが、私たちの身のまわりの環境変化を知る自印のひとつとして、これからも引き続き注目していただきます。



▲コハクオナジマイマイ
新井和雄さん撮影(神奈川県平塚市)



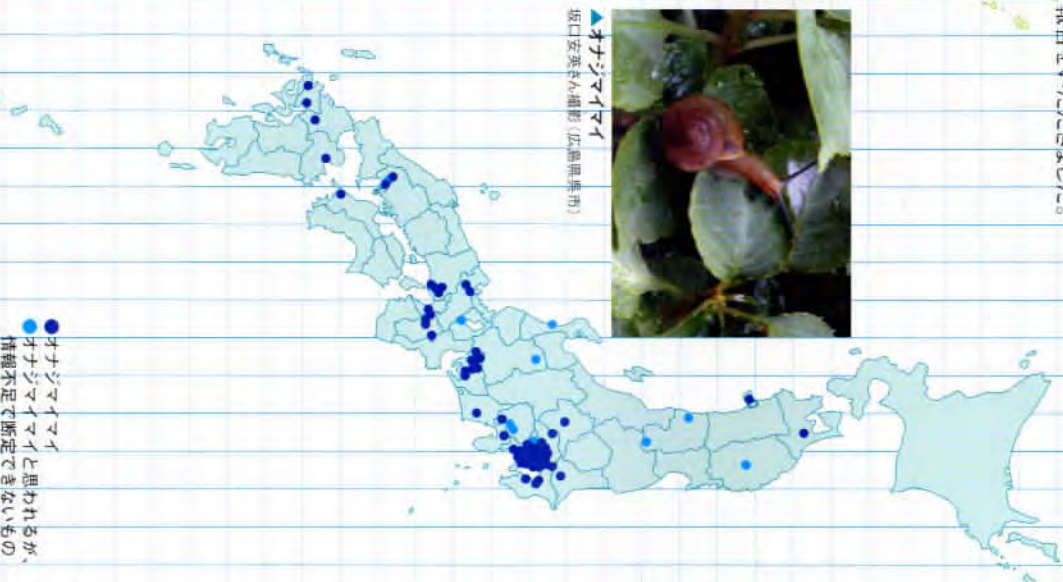
●コハクオナジマイマイ
●コハクオナジマイマイと思われるが、
情報不足で断定できないもの

オナジマイマイ ― 江戸時代からの国外来種の今は

江戸時代は、サツマイマイについて中国・琉球・蘭摩を経由し、その後、日本全土に広がったと考えられているカタツムリです。分布域はウスカワマイマイよりは広域に渡っているものの、やはり、大阪を除いた大都市近郊での報告例が目立ちました。北は青森県上北郡、南は沖縄県沖縄市から報告をいただきました。



▲オナジマイマイ
坂口安英さん撮影(広島県東市)



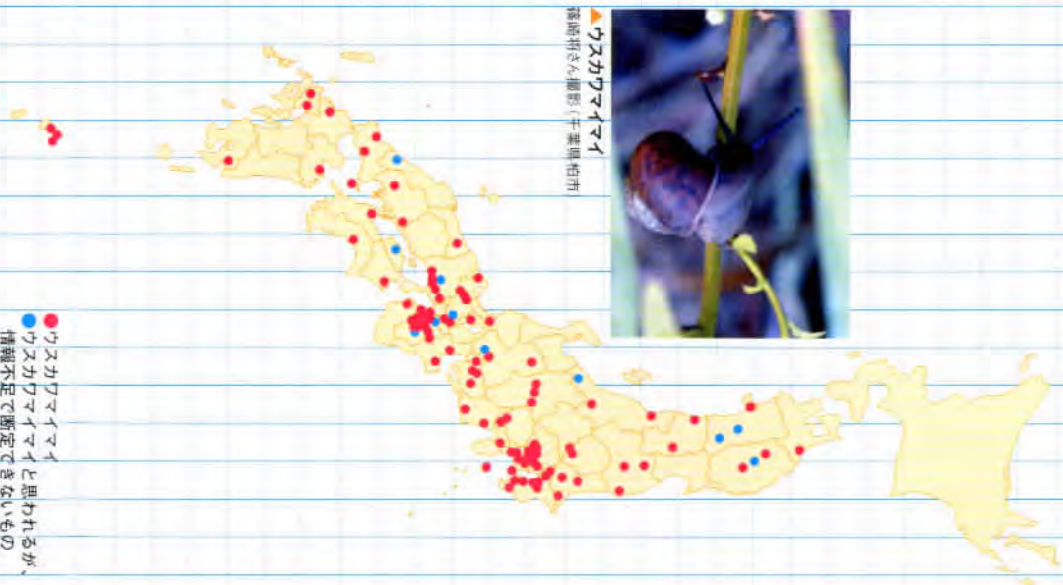
●オナジマイマイ
●オナジマイマイと思われるが、
情報不足で断定できないもの

ウスカワマイマイ ― 全国的な分布

863匹と圧倒的に多かったのがこの種です。従来から全国的に生息域を拡大していったのですが、今回も全国的な分布はつきりと現れました。草原性、すなわち、比較的乾燥に強く、関東・関西・東海などの大都市近郊から報告が多く寄せられました。北限は青森県八戸市でした。



▲ウスカワマイマイ
種崎利夫さん撮影(千葉県柏市)



●ウスカワマイマイ
●ウスカワマイマイと思われるが、
情報不足で断定できないもの

注目種3種と私たちの暮らし

全国的に分布域を拡大しているこれらのカタツムリですが、やはり、都市近郊からの報告が目立ちます。これらは、比較的乾燥に強い性質を持つことから都市部での環境に適応できるということが考えられるでしょう。移動能力に欠けるカタツムリがこれほどまでに生息域を拡大できたのは、マイマイに比べ樹上で生活していることが知られています。都市部の開発で樹木が伐採されたにしても、ミスジマイマイほどは樹上を好むわけではないヒタリマキマイマイが比較的生存できたのではないかと考えられます。

クチヘニマイマイ

殻が大きく、殻の模様や口の部分の紅色が特徴的で、植原高校の生徒さんをはじめ多数寄せられた調査シートからも明確に同定することができました。主として近畿圏に生息しているこの種で今回注目したいのは、大阪府の市街地からは報告結果がまったくなかったことです。考えられる要因として、大阪平野の中心部は、他の平野とは違い、開発が進み、かつ、カタツムリが住みやすいような丘陵地や台地が少ないということが考えられるでしょう。



▲クチヘニマイマイ
竹園里穂さん撮影(東京都宇治市)

ヒタリマキ、ミスジ、イセナミ、クチヘニ

これらのカタツムリは注目種とは別に今回、多数の報告が寄せられました。これらは比較的大型で、樹木や石垣に登ったりするカタツムリであるため、一般的に人目に付きやすいということが今回の報告数につながったのだと思います。

ヒタリマキマイマイとミスジマイマイ

この2種の関東地方の分布に焦点を当てると面白い結果が見えてきました。下のグラフのとおり、ヒタリマキマイマイは東京都の報告数が圧倒的に多いのに対し、ミスジマイマイは同様な結果が得られませんでした。ミスジマイマイはヒタリマキ



▲ヒタリマキマイマイ
吉村利夫・園子さん撮影(新潟県新潟市)

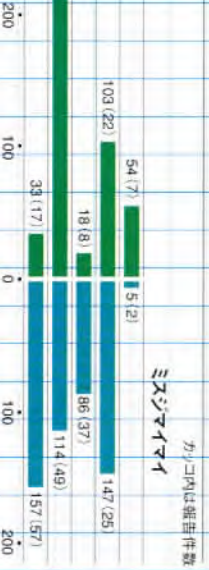


▲ミスジマイマイ
五十嵐郁夫さん撮影(神奈川県横浜市)

ヒタリマキマイマイとミスジマイマイの報告個体数



ヒタリマキマイマイ



ミスジマイマイ

最後に...

失われゆく自然、人的影響によって変わりゆく自然の前に私たちは今、心を傾けなければならない時期にきていると思います。今回の自然しらべから得られた結果から考えられる仮説は、まさに、私たち人間の生活圏の拡大や豊かさの向上に連れて、私たちが自然に対して行ってきた功罪を物語るように感じます。

多くの人々の協力を得て、こうして2004年の自然しらべの結果をご報告することができました。しかし、これは人と自然との共生といった私たちが目指す最終的なひとつのゴールへの小さな小さな一歩です。

河津果からは外来種のアメリカマイマイが農作物を食べ荒らすという被害報告も多々寄せられ、カタツムリのような生き物を保護することに異議を唱える方々の声も寄せられました。

異なる自然観、生命保護観、本当に人々の価値意識は様々です。そういった価値意識の違いの人々に対してのコミュニケーションや今後のあるべき姿の模索など、自然しらべの課題は無限にあるでしょう。そういった課題を踏まえて、今後、私たちひとりひとりが進むべき未来に向け、今回の自然しらべが、私たちの自然を愛する良心に働きかけ、普段の生活を見つめなおす一つの機会となることを心から願っています。

(糸岡栄博・田原シヤベの飛鳥世界(タタラ))